

有明海奥部における貧酸素水塊の発生状況（10）

（独）水産総合研究センター西海区水産研究所
有明海・八代海漁場環境研究センター

有明海湾奥部底層の溶存酸素の変動（7月上旬から8月上旬）

有明海奥部では、7月11～14日の豪雨による洪水のため、表層に低塩分水が広く分布し、湾奥の浅海域では底層でも著しい低塩分となり、継続しました（図1～3）。このため、14日頃より湾奥の観測点1（浜川観測塔）や観測点2（六角川観測等）、観測点14（浜川沖）では、干潮時には底層まで低塩分・高酸素の水塊が分布する一方、満潮時には底層に高塩分の貧酸素水塊が分布する変動を繰り返しました。22日頃からは底層の溶存酸素がさらに低下し、観測点13（国営干拓沖）や14（浜川沖）では5%未満の著しい貧酸素になり、28日以降は両地点で、ほぼ無酸素状態になりました。また、沖合域の観測点P6（沖神瀬西）では表層と底層の密度差が大きくなった6月末より底層の溶存酸素が急速に低下し、7月2日には溶存酸素が20%程度まで低下しました（図4、5）。洪水後の7月15日以降は表層と底層の密度差がさらに大きくなり、底層の溶存酸素飽和度が10%以下に低下して著しい貧酸素状態となり、継続しました。

8月1～2日に九州南方海域を東から西へ通過した台風10号による北寄りの強風により、有明海湾奥西部海域の底層では無酸素状態から改善しました。さらに、8月2～4日の大潮期にも、幾分改善しました。しかし、沖合域の観測点P6（沖神瀬西）では密度成層が継続し、底層では貧酸素が継続しています。

また、8月9日の小潮期以降には湾奥部浅海域の観測点1、13、14等で底層の溶存酸素が低下しています。

8月10日に17機関が共同で実施した「有明海における貧酸素水塊の一斉観測」の調査結果によると、有明海湾奥西部海域と諫早湾内の底層には、溶存酸素20%以下の貧酸素水塊が分布しています。（図6～7）。

なお、本情報に使用している観測データは全て未補正值です。

今後の見通し

今後は、潮汐が大きくなる8月中旬の大潮期（8月17～20日）頃に向けて貧酸素が改善することが期待されます。

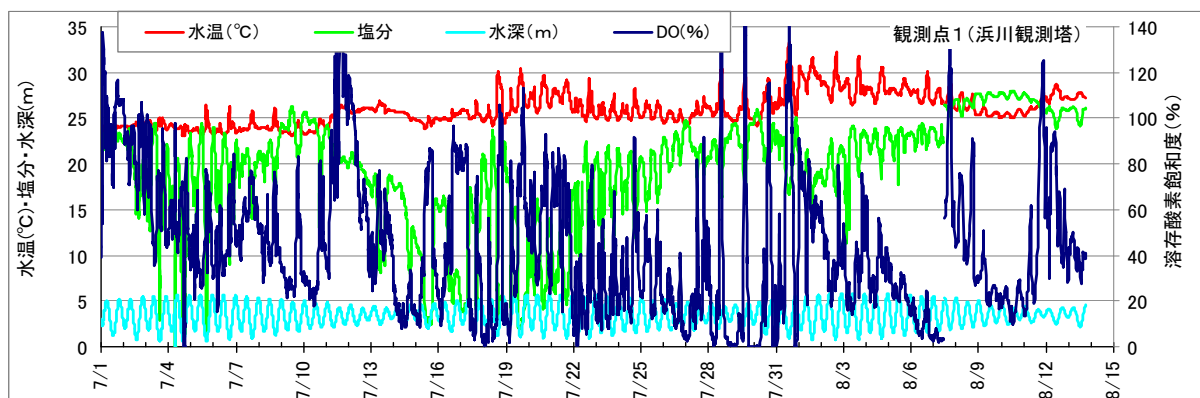


図1. 有明海奥部底層の溶存酸素等の変動（観測点1：浜川観測塔）

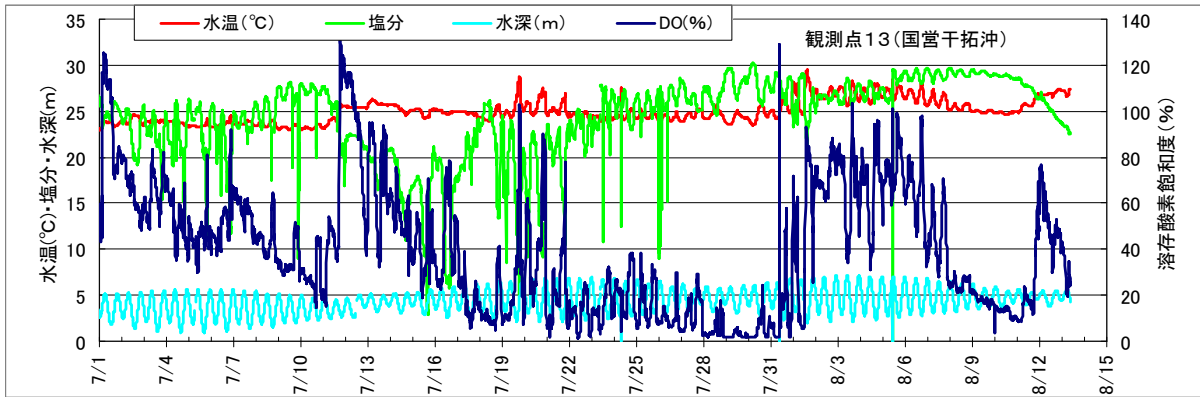


図2. 有明海奥部底層の溶存酸素等の変動（観測点13：国営干拓沖）

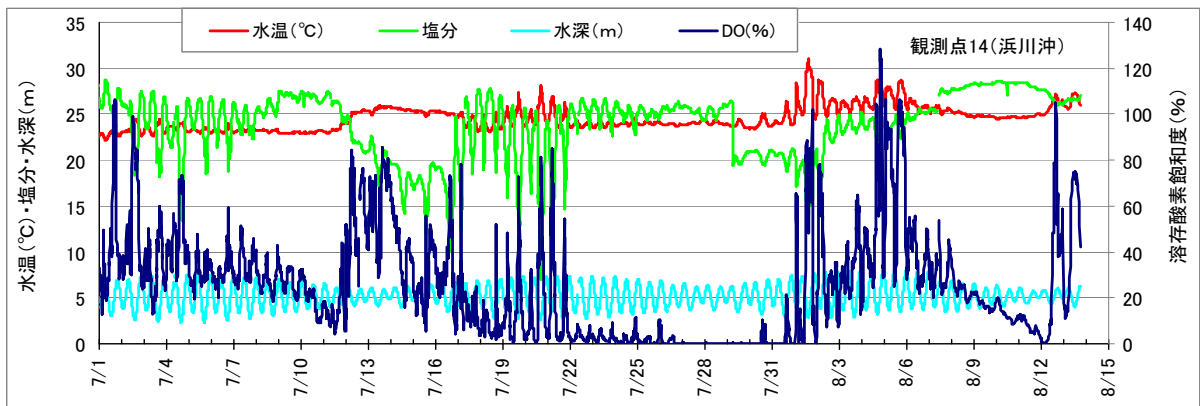


図3. 有明海奥部底層の溶存酸素等の変動（観測点14：浜川沖）

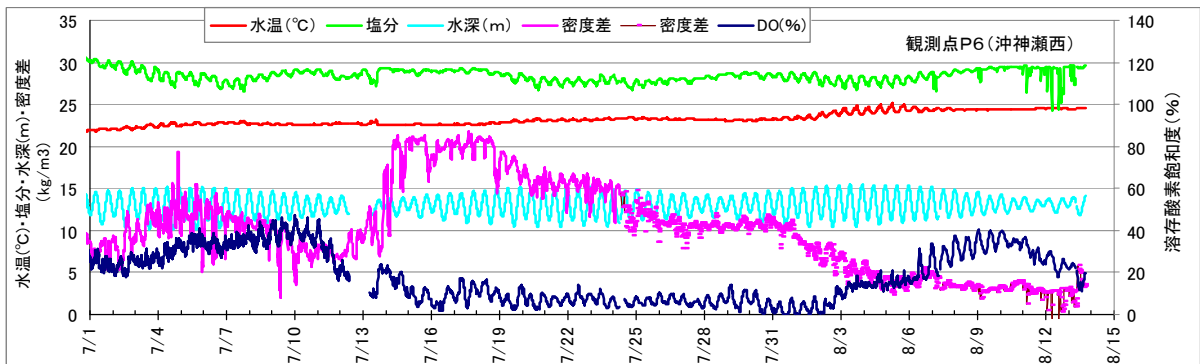


図4. 有明海奥部底層の溶存酸素等の変動（観測点P6：沖神瀬西）

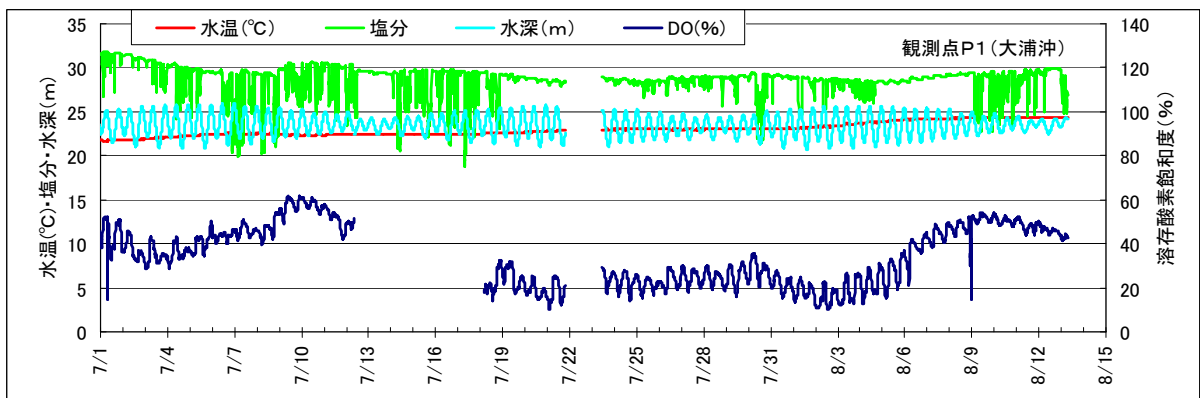


図5. 有明海奥部底層の溶存酸素等の変動（観測点P1：大浦沖）

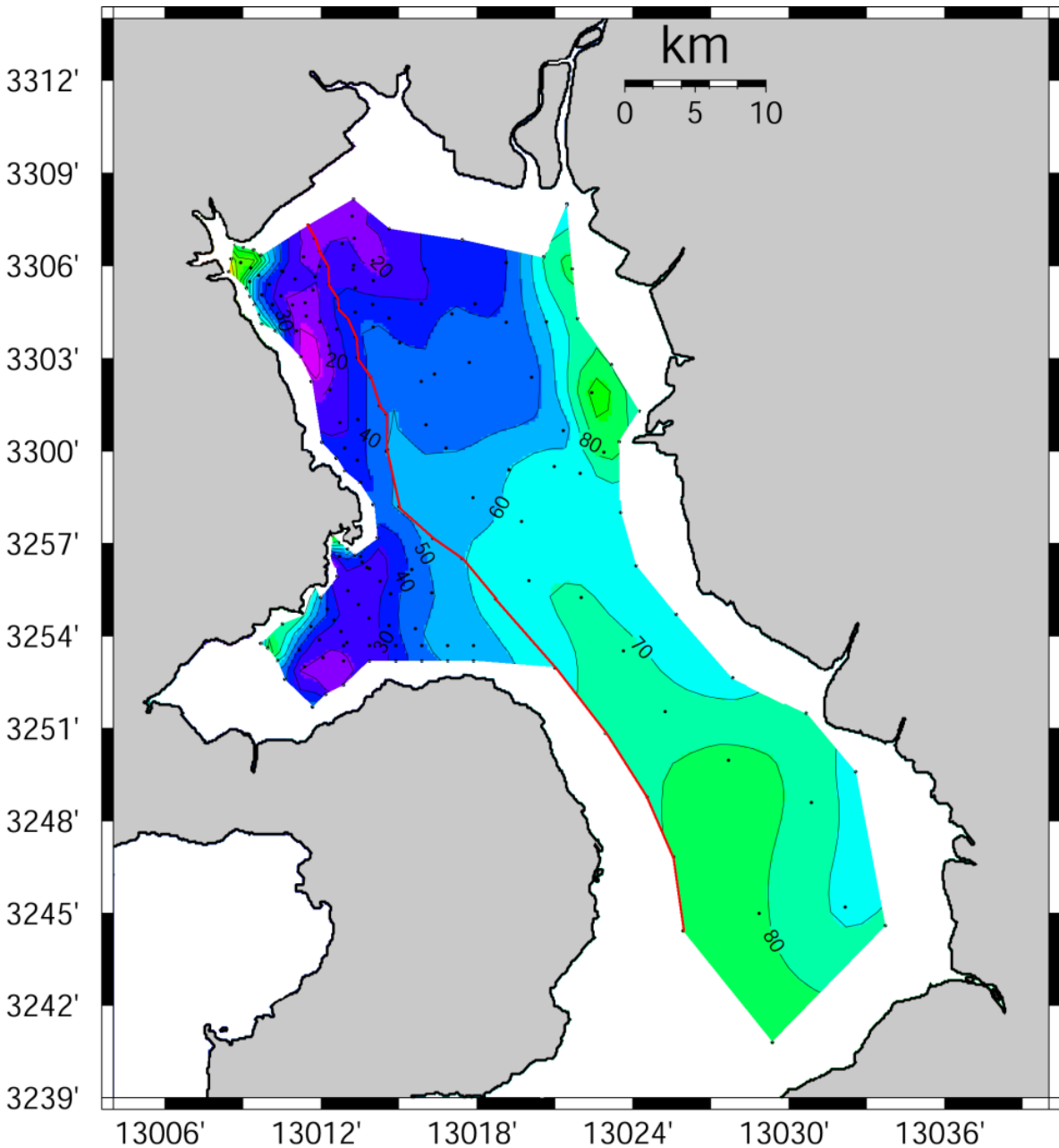
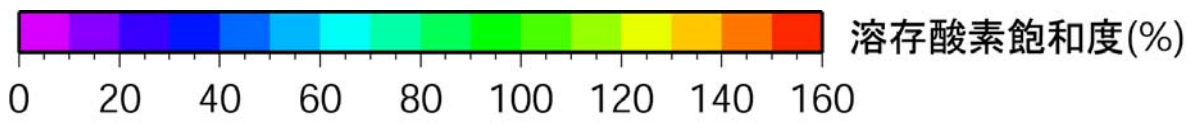


図6. 有明海の底層の溶存酸素飽和度(%)の分布(2012年8月10日)
 (国(水産庁, 農林水産省九州農政局, 環境省, 国土交通省熊本空港・港湾整備局), 県(福岡県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県), 大学(九州大学, 佐賀大学, 熊本大学), 民間企業および西海区水産研究所から構成された計17機関が協力して実施した「有明海における貧酸素水塊の一斉観測」による)

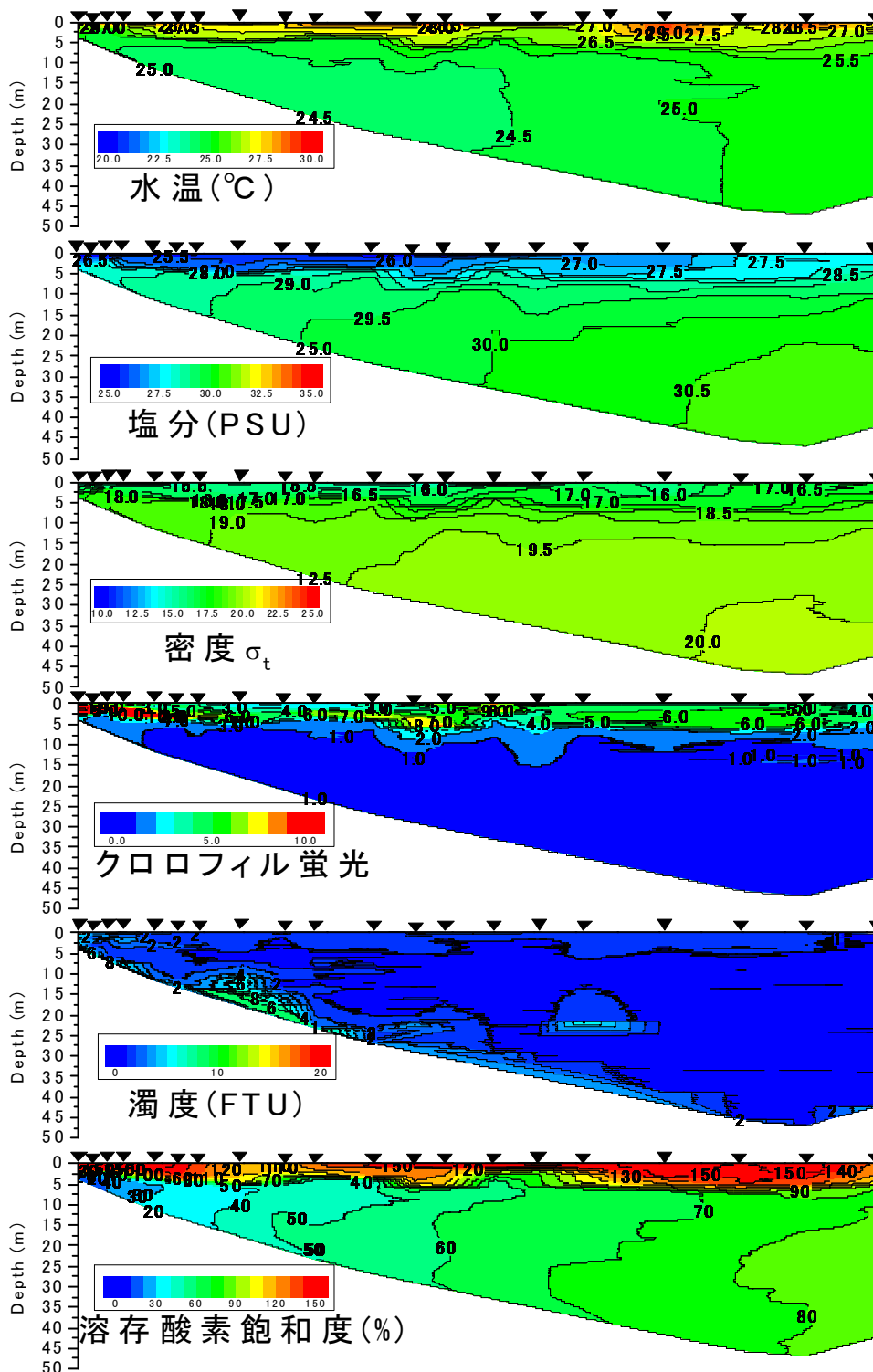


図7. 有明海（図6の断面）の水質の鉛直分布（2012年8月10日）
 （国（水産庁，農林水産省九州農政局，環境省，国土交通省熊本空港・港湾整備局），県（福岡県，佐賀県，長崎県，熊本県），大学（九州大学，佐賀大学，熊本大学），民間企業および西海区水産研究所から構成された計17機関が協力して実施した「有明海における貧酸素水塊の一斉観測」による）